D組1枚目

3年生が宝塚市に取材し、記事を書きました

宝塚市の全面的な取材協力と、一部写真提供も受けました。
記事・レイアウトは産経新聞社の協力を得て作成しました。

雲雀新聞

令和5年(2023)
3|23[木]

雲雀丘学園中学校
〒665－0805
兵庫県宝塚市雲雀丘4－2－1
TEL：072－759－1300
FAX：072－755－4610

立場違えど 認め合う議会

特徴的な運営…投票率改善課題

宝塚市の市議会はどのような役割を果たしているのか。雲雀丘学園中の3年取材班は、宝塚市役所の議長室で、三宅浩二議長と、議会運営委員会の委員長を務める田中こう市議を取材した。議会と聞くと、異なる政党や会派が激しく対立するイメージもあるが、宝塚市議会は「互いを認め合う」ことを重視しているところがポイントだ。

この点は、ほかの地方議会と比べても特徴的で、歴史的にもずっと続けられてきているという。考えが異なっても、受け入れる。議会では、議員が市長や市の幹部に質問するが、質問に向かうとき、拍手をしておくるという。

市議会は、年4回定例会を開いているが、そのうち3回の定例会で、議員（定数26、現在は24人）がほぼ全員質問を行うところも、特徴的だという。定例会では、液晶モニターをつかってデータを表示するなど、わかりやすい議事進行を行っている。実際に対面する人と、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」をハイブリッドに取り入れた議会報告会も行っている。

一方で、これだけ特徴的な議会を行っても、宝塚市の投票率は低く、そのことが課題になっているという。市長選と議員の選挙の日程がばらばらで、関心が相対的に低くなること、また新型コロナウイルスの感染拡大が影響し、人々の間の交流がなくなったことも原因として考えられる。

取材の中で、「議員や議員に向いている人は、どんな人か」と聞いた。2人ともに「（ほかの人から）週末でもらえる人がなるべきだ」と答えた。個人がおっている強みをみんなから支持してもらえる人、そしてみんなの前に立って強みを発揮している人だ。

三宅議長も、田中市議もとても明るく、話が面白かった。また地元として宝塚市に誇りを持っていると感じた。地方の暮らしにも、政治がしっかりとかかわっていることを、私たち若者もよく考えて、投票で意見を述べることを大切にしないといけない。（木越愛心、徳田瑞奈、山澤朱利）

市議会の議場で、宝塚市議会の田中こう・議会運営委員長（左）らに取材する生徒たち

令和3年12月に行われた「第3回宝塚市手話言語発表会」では、山﨑晴恵市長も手話であいさつしている

手話で情報伝えたい

環境づくり促進へ条例も

雲雀丘学園中3年の取材班は、宝塚市障碍福祉課の田中雅之課長と、手話通訳士の笹倉博子さんと、田中準子さんにインタビューした。さまざまな障碍があるから、「障碍福祉課」という表記や「碍」の字を使用しているという。

宝塚市の障碍福祉課は「碍」という漢字を使っているところが特徴的だ。通常は「害」という漢字を使っているケースが多いが、「害する」「わざわい」などの意味があることから、宝塚市は「がい」を使っていた。

その後、今の「碍」という漢字を使ってもいいという考えが示されたことから、「障碍福祉課」というのある世界が圧倒的な社会、文字だけでは受け取れないものが音にある。

宝塚市では、平成28年に、手話への理解促進や手話を使用しやすい環境づくりの推進などをうたった「手話言語条例」が公布、施行された。担当者は「やっと光があたった」と喜んだという。

インタビューを受けてくれたみなさんは「『手話で情報を知りたい』という人たちに、いろいろな情報を伝え、明るい気持ちになってもらえる瞬間、聞こえる人も、聞こえない人も、たくさんの人がお互いをたたえあえる瞬間に立ち会えることがやりがいです」と話していた。

手話はだれでも習得できる。例えば電車内の放送が聞こえなくて困っている人がいたら、情報を伝えてあげることもできる。今回取材をして、みんなが自分にできることをやっていくことが大切だと思った。（小澤愛佳、南美桜）

漫画の神様 偉大な足跡

手塚治虫記念館

現在ほど日本の市民の中に漫画が浸透していなかった70年前に、ストーリー漫画の基盤を確立した手塚治虫さん。私たち雲雀丘学園中3年の取材班は、宝塚市立手塚治虫記念館の矢野喬士さんを取材した。矢野さんは「手塚治虫は漫画の神様であり、現在の漫画家にも多大な影響を与えている」と話してくれた。

手塚さんは40年以上も漫画界の先頭を走り続け、SFからサスペンス、恋愛のものまでも描くことのできる、オールジャンルな漫画家であった。矢野さんによると「ほかに面白い漫画家がいると、一面白いところを すぐに吸収した」という。柔軟に、いろいろなことを取り入れられるのも、すごいことだ。

意思が通じないことによって起こる悲劇が、手塚さんの漫画のテーマにも影響しているという。手塚さんは戦後まもないころ、JR宝塚駅付近で、酔っ払っていたアメリカ兵に呼び止められ、道を尋ねられたが、英語がわからないため、しどろもどろになっていると、いきなり兵士に殴られた、とのエピソードを矢野さんが教えてくれた。

現在では、手塚さんの作品は世界中に知られているが、記念館は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を大きく受けた。コロナ前は、年間10万人ほどが訪れていたのに、最も少ないときには年間の入場者数が3万8千人にまで減った。昨年は、5～6万人ほどに盛り返したという。

コロナ禍が問題となってから、記念館もさまざまな工夫を行ってきた。館内のライブラリースペースでは、手塚さんの作品を読むことができるが、QRコードで申し込めば、接触しないまま、スマートフォンで好きな作品を読むことができる。

手塚さんは平成元年にになったが、手塚プロダクションの人が今も絵を引き継いでいる。手塚さんが描いた漫画原稿も、虫に食われないようにするため、温度調節を行い、大切にプロダクションに保管されてあるという。

私たちは、手塚さんのことをもっとよく知って、その思いを発信していかなければならないと思った。（鈴木悠加、正尾南帆、松村燎）

努力重ねる真のヒーロー

消防本部

私たちの日常生活の安全を守ってくれている宝塚市消防本部情報管制課の谷口直輝さんに、雲雀丘学園中3年の取材班がインタビューした。宝塚市に加え、川西市と猪名川町で起こった火災などについての情報を取り扱い、出動の指示などを行っている。

では、火災のときに私たちは何をしたらいいのだろうか。質問に対し、谷口さんは「まずは一刻も早く通報してほしい」と答えてくれた。

通報を受けた情報管制課が、火災なのか、救急なのか状況を把握していく一方で、出動する隊に向けて「予告指令」を出し、準備が進められていく。

予告指令によって準備を始めた出動隊は、地図を使って発生場所や、到着するまでの大まかな時間を事前に調べあげておく。出動する隊員の中には、消防服をあらかじめ蛇腹式にたたんでセットしておき、出動する際には、すぐ身につけることができるようにしている人もいる。

市内のさまざまな地域に向かうことを想定した訓練や、あるいはいろいろな状況で出動するケースを想定した訓練など、何度もいろいろな訓練を繰り返しておき、シミュレーションしておくことも大切だ。そうした積み重ねが、一刻も早い活動につながる。

令和4年の宝塚市消防本部の「消防年報」によると、令和3年に宝塚市内で発生した火災は26件、前年より1件減少した。平成24～令和3年までの10年間で、令和元年とともに、2番目に少ない数だ。

一方、令和3年の救急の出動件数は1万960件。前年より118件増えており、平成27年以降、7年連続で1万件を超えている。

今回、取材をして、私たちの生活が、消防本部のみなさんの絶え間ない努力によって守られていることが分かった。前線で活動する「ヒーロー」と、情報管理や指示など、裏側から支える「ヒーロー」が活躍していることも分かった。（大久保志歩、加島菜緒子、鈴木彩華、光家希）

「おいしい」仕事の原動力

学校給食課「食品ロス」にも配慮

だしに使った昆布も松前煮として、おいしく食べている

宝塚の子どもたちの健康に大きく貢献している学校給食について、私たちは宝塚市学校給食課の三浦庸平課長や栄養教諭、学校給食調理員のみなさんに取材した。「子どもたちが給食を食べて、『おいしい』と感想を話してくれることがうれしい」とやりがいを話してくれた。

各学校の給食を全体的に管理している学校給食課は、仕入れ先と契約して食材を発注している。また学校給食費の管理も行っている。栄養教諭は、小・中学校の献立の原案をつくっている。

宝塚の特産品、例えば宝塚ねぎやイチゴなどを使ったり、生徒からのリクエストや、栄養のバランスといったさまざまな観点から献立の原案は作成され、その後、多くの関係者が集まり、献立作成委員会という会議を通して、正式メニューになる。

私たちが社会の授業などで習う「食品ロス」にも気を配っているという。例えば、だしに使った昆布を、細かく刻んでふりかけにして使ったり、野菜のヘタなど、捨ててしまう部分についても、できる限り少なくしていったり、といった取り組みを行っている。

宝塚市で学校給食に携わる人たちが重視しているのが「食育」だ。食に関する正しい知識をつけてもらい、子どもであれば、将来、望ましい食生活を選ぶ力をつけてもらう。中でも特徴的な取り組みが「食育劇」だ。

学校給食の調理員が、好き嫌いをなくし、何でも食べられる子どもたちになってほしいという願いから、台本や衣装、小道具などもすべて手作りの食育劇を企画し、学校で披露している。

給食は、みんなを笑顔にするだけではなく、健康に毎日をおくる力をつけている。学校給食に携わる人たちが、児童、生徒のことをよく考えて、いろいろな努力、工夫をしてくれているから、学校生活が成り立っているのだと思った。（末次択輔、中尾光、藤田繁明、藤田結衣、二井真）